

全体会議 (分散会報告)

第五十回中央教化研究会議 第二部開催にあたって

問題提起

今回の中央教化研究会議は、第一部で「仏陀論」と題したご講演を各講師先生方より頂きます。仏教関連書がこれだけ流布する時代にあつては、人々にとつて仏陀・釈尊の受け止め方に変化が生まれてきています。私たちはさまざまな視点に関心を払いつつ、私たちの仏陀観、釈尊観をつねに確認し、「久遠実成の本師釈迦牟尼仏」への鑽仰をさらに確固たるものにしなくてはなりません。

さて、日蓮聖人を宗祖と仰ぐ他の宗派・教団・団体にあつては、聖人の教えのとらえ方と本尊の位置づけなど、さまざまな点でわれわれ日蓮宗と基本的な考えを異にします。教団史をひもとけば、そうした教義の解釈の違いが相反と分裂を生み、離合集散のエネルギーともなってきたことは明らかです。

とくに大石寺系新宗教の一部団体は、近年、組織的に過激な活動として、日蓮宗寺院に対して突然来訪し、法論と称して教学・信仰上の疑問を論ずるといった行動が報告されています(大石寺はこのような団体を破門とし認めません)。

宗門ではそのような団体への対処方法を各寺院へ通知し、不当かつ不法な行為に対しては一貫した姿勢を示してきました。現代宗教研究所でも、そうした団体の奉ずる教義的特徴や勧誘方法などについて、教化資料にまとめ広報してきたところです。

私たち宗門が降誕八〇〇年への布教活動に取り組む一方で、これらの団体は龍口法難七五〇年に向かってさらに先鋭化した活動をとりつつあることが知られています。大石寺系新宗教においては、龍ノ口こそが「人間日蓮大聖人」が「本仏日蓮大聖人」へと変わったとされる瞬間だからです。そのため、これらの団体は龍口法難七五〇年ご正当に向かつて霊跡本山のある地域などにおいて大規模な行事の計画もしています。そういった状況のなかで、日蓮宗寺院への圧力が増してゆくことも予想されます。

かかる事態ながら、宗門では地域によって未だ認識に差があり、危機感が共有できていないという問題があります。そこで、今回の研究会議では第二部を、こうした大石寺系教学を基礎とする団体の基本的な考え方を知る機会とし、日蓮宗の教学との相違点を確認していきたいと考えます。また、彼らが「法論」と称する活動の一端を具体的に知り、参加者のみなさまには、教師・檀信徒ともに現場での教化活動に役立てて頂きたいと思えます。

今回の教研会議には、副題として「対論の教化学」と付してあります。仏教の長い歴史は「対論」の歴史そのものといっても過言ではありませんし、それが仏教の教えの豊かさや広がりを生んで来ました。しかし、一部団体による先述のような行為は「対論」に値しないものです。会議を通して知ることとなる知識を使って、徒に特定の一部団体との対決を奨励するものではありません。第二部の学びによって私たちの教えとは異なる理解や解釈を知ることを通して、私たち自身の教学を解きほぐし、教化の依って立つ足元をしっかりと見直す契機として頂くために、「対論」という言葉を選びました。

四つの分散会は同じ課題を扱います。詳細は各コーディネーターの進行のなかで行われますが、会議では各地の事情などをお互いに情報交換をしつつ、参加者のみなさまには主体的・積極的に取り組んでいただくことを願っております。

第Ⅰ分散会

ブツダと私たちを考える―対論の教化学―

座 長 灘上智生

コーディネーター 小瀬修達

ロールプレイ 池浦英晃・松森孝雄

助言者 田澤元泰・中村潤一・鈴木隆泰

記 録 鈴木是妙

運 営 原 一彰

一、運営について

今回の中央教研は二部構成となっており、全体テーマである「ブツダと私たちを考える―対論の教化学―」を、分散会での討議を通して、出席者がより理解を深めるとともにそれに関わる諸問題を共有することが課題とされた。

第Ⅰ分散会では、一日目の討議時間を「ブツダと私たちを考える」の問題意識を高める場と設定し、基調報告・基調講演の内容を受けて、それについて出席者の理解や新たな示唆があったかどうかを語り合う時間に充ちた。翌日の二日目は、「対論の教化学」を重点テーマとし、各分散会において討議時間に入る前に共通の手法で行った、運営者による「模擬対論」とコーディネーターによる「レクチャー・解説」を受けたのち、昨今の法華系新宗教をめぐる生じている事象について、それぞれの体験をまじえて話し考える時間とした。出席者は計三十五名だった。

二、問題提起

座長より、今回、出席者に事前配布された「問題提起―第2部開催にあたって」を、いま一度読み上げて分散会の問題提起が確認された。討議するテーマを両日で分けたことは前述の通りであるが、一日目に関しては、「ブツダと私たちを考える」という大きなテーマを「基調報告・基調講演の内容から、新たな「気づき」がなかったか」と問いかける形で進められた。出席者は講演などで示されたブツダ（釈尊）に関わる研究動向や日蓮教学上の釈尊観・日蓮本仏論等から得られた新視点や感想を述べ合った。

二日目も同様に、「対論の教化学」を主題として取り上げるに至った「問題提起」の趣旨を確認し、討議に臨んだ。

三、分科会討議

一日目「ブツダと私たちを考える」

- ・初期仏典の中にすでにブツダを神話的存在として語り、超越的本質が示されていたことは、久遠の仏を説く私たちの信仰に大きな示唆を与えてくれた。
- ・「久遠実成の釈迦牟尼仏」をどう説いていくかが大きな課題。檀信徒にもっと周知していけるようにしたい。
- ・自分としては、「永遠の命を持ったお釈迦様が私たちを見守ってくれている」という感覚を大切にしている。
- ・自坊では、「久遠実成の釈迦牟尼仏」について自我傷に示された「命の永遠性」から説明するようにしている。
- ・真宗門徒の多い地域なので、釈尊の話をするときに、阿弥陀如来を引き合いに出し、比較して話すと理解が得られやすい。

・「ブツダ」という呼び方は、学術的にはよいかもしれないが、やはり、檀信徒には「お釈迦様」が親しみやすい。また、日蓮本仏論のとらえ方に対しては、日蓮宗の祖師信仰に関わる意見が目立った。

・祖師堂が本堂よりも大きく、祖師像が大きい場合がある。日蓮宗の熱烈な祖師信仰があるなかで、私たちは日蓮本仏論をどう考えていけばよいのか。

・祖師信仰と日蓮本仏論の違いについて明確に理解する必要性を感じた。

・日蓮聖人への「報恩」が私たちの信仰の大きなウエイトを占めているという現実をきちんと考えること。

・私たちが日蓮聖人を「お祖師さま」と呼ぶように、宗祖は身近に感じられる存在。それは本仏論とは違う伝統に培われた身近さである。

教化の現場で「ブツダ（釈尊）をどう説くか」という実践的で切実な問題への発言もあり、この話題は葬儀の場などで、「いのちをどう説くか」という関心へもつながった。

・議論の材料のためではなく、「久遠」について共有できるものを、布教資料のような形でわかりやすく示すことはできないか。

・「靈山浄土」、「靈山往詣」をわかりやすく伝えることで、釈尊と私たちの関係性をきちんと伝えることが重要。また、「往詣」と「往生」の違いをよく認識するように。

・葬儀、通夜などの場で「いのち」、「たましい」について理解を得られるように、教学的にもきちんととらえるこ

とが大切ではないか。

・「肉体としての命（生命）」と「魂としての命（いのち）」と区別して説くようにしている。私たちの心にいつまでも残る「魂としての命（いのち）」の大切さを訴えること。

二日目「討論の教化学」

法華系新宗教の布教活動に関しては、座長が出席者に挙手を求めて、「寺に訪問を受けたことがある」が八人、「檀信徒が訪問を受けたり、勧誘された」が十五人という結果であった。出席者の三十五人は全国各地からあったが、約半数がなんらかの訪問・接触を受けた経験を持っている実態がわかり、それらの事例について発言があった。

- ・ 檀信徒の親戚が勧誘され、相談を受けた。
- ・ お寺の評判を下げるような話を地域の中で言いふらすという嫌がらせがあった。
- ・ 信者のふりをして来寺し、法論 と称して話をする者の訪問を受けた経験がある。
- ・ 一人暮らしの高齢者宅を訪ねるケースが多いようだ。
- ・ ある団体は、その他の法華系新宗教の信者を勧誘し、入会させることに使命感を持って勧誘活動をしている。
- ・ 訪問してきた団体の信者の多くは、逆にこちらからの質問には答えられない。あくまでも彼らは私たちにとつて、救済の対象であると認識すべきである。柔和な対応が救済するきっかけになる。

他にも、実際に訪問を受けた時の体験から具体的な質問を紹介し、「このような時はどう返答したらよいか」とい

った話も出た。本尊勧請の形式や書写の問題についても話が及んだ。

また、寺院訪問を行い、「法論」と称して活動する目立った団体以外でも、「最近近くに、新たに分派した法華系新宗教の会館があり、そちらの盛況のほうが自坊として重要視」しているといった意見、「法華系新宗教の動向についてのまとまった情報があつたら欲しい」という要望も出された。

四、おわりに

分散会は、最後に座長が、「基調講演、問題提起から討議に至るすべては、私たち教師が自分たちの立ち位置を確認するためのものである。今回の中央教研を通して、さらに研鑽を重ねていかなければならないとの思いを新たにしたい」と述べ、討議が締めくくられた。

法華系新宗教をめぐる各地で抱える問題はそれぞれであろうが、出席者の方々には分散会で行われた意見交換や情報を各教区・管区に持ち帰り、教化の現場で生かして頂くことを願いたい。

第Ⅱ分散会

ブツダと私たちを考える―対論の教化学―

座長 蓮見高円

コーディネーター 小林康洋

ロールプレイ 小林康洋・本間文裕

記録 吉木祥介・本間文裕

運営 古河良啓・坂輪宣政・成田東吾

一、運営について

一日目は所長の基調報告、四先生の基調講演を聞いた上で、全体の問題提起に示されている我々が思う「仏陀観とどのようなものか」について、具体的な言葉を使って三十分間議論した。一グループ八名で三グループに分け、少数化することで誰でも気軽に発言ができるようにした。

また、グループ間で討議された内容を全体で共有する為、模造紙（ライティングシート）を壁に貼り、グループごとに意見をまとめて記載し、後に代表者が発表した。

二日目は初めに配布資料の確認をした後、一日目に各グループで討議された仏陀観に対する内容を確認した。

サブタイトルの対論の教化学という観点から、我々日蓮宗と大石寺系新宗教との教義の違いを確認する為、対論のロールプレイを行った。その後コーディネーターより、の中で触れた、大石寺系新宗教の教義について解説がな

された。

その後、一日目の討議と同様の形式で、我々自身の足元を見つめ直す為の討議を一時間行った。

二、分散会討議

一日目

四先生の講演を聞き、インド、アジア、日蓮宗以外の日蓮系教団における仏陀観の概念を受けた中で、仏陀観や本尊観とはどのようなものかについて討議した。

グループA

○四先生の講演を聞いて仏陀観をどのように受け止めていけば良いのか、これからどのように考えなければならぬのか、日蓮宗の仏陀観を広げた考え方や、仏陀とは何かということについて討議された。

- ・悩みを解決されるため出家された人間的な魅力を感じる。
- ・宗祖を窓口にしないと仏様へは到達不可能である。
- ・人間釈尊は人間ではあるが超越した存在であり、お題目を唱えて所化をもって同体となり、私たちの心に存在するものである。
- ・ブツダを親しみやすく考えるのは良いが、超越的、自分が目指すものとして受け止めるべきである。
- ・生老病死の悩みの解決こそがお釈迦様の原点である。
- ・法華経の自我偈の三世の釈尊は神格化されている。これは目指すべき存在として仏陀ということを考える必要がある。

- ・仏と魂は同体、共有ではないだろうか。

グループB

○今回の四先生の基調講演の感想という形で仏陀観について話し合った。

- ・単純で分かりやすく明解であった。
- ・頭で考える部分と心で考える部分がある。
- ・人間ブツダ観や釈迦は人間であるのかということ詳しく知りたい。
- ・なぜ真理を神格化することなのだろうか。
- ・無始無終とはどういうことなのだろうか。
- ・永遠と永遠の違いとはどのような事なのだろうか。
- ・久遠実成の永遠性について知りたい。
- ・日蓮本仏論をもっと詳しく聞きたい。

グループC

○グループCでは檀信徒や未信徒の視点からの仏陀観を考えた。未信徒や檀信徒の立場に立って説かなければならぬということが討議された。

- ・仏陀観は地域によって変わる。（福井県は真宗、千葉県は日蓮宗が多いなど）地域によって、阿弥陀様とお釈迦様、日蓮様が重なり合うという現象が起きている。
- ・今後の未来に向けて、檀信徒に信仰の上で先祖供養をしていくことを優先するのか、それともしっかり仏様の存在

を見ていくことが大事なのか、地域を超えた信仰として何を根付かせていくのか、日蓮大聖人を通して考えていかなければならない。

・檀信徒から見ると、仏陀観とは、仏に遺骨をブツダなどではないか。すなわち仏様とブツダとは必ずしも一致しない。仏様とは、遺骨であってお釈迦様まで辿り着かないのではないだろうか。

●全体での討議

仏陀観について各グループで纏めて発表した内容に対し、相互に質問があった。

問一 久遠実成をどのように説明するのか？

永遠とは肉体を含めて永遠なものであり、久遠とは肉体が滅しても 永遠に続くものである。仏陀は久遠であるけれど、永遠ではない。

問二 永遠と久遠の違いとはどのような内容であったか？

絶対的な救済があると信じていることが、久遠という意見があった。永遠は有始無終、久遠は無始無終である。生まれる時、死ぬ時をどのように考えるかで、永遠と久遠の違いが生じてくるのではないか。

問三 仏と遺骨がイコールということをもっと詳しく知りたい。ここでいう仏とは、ご先祖様という意味なのだろうか？

私たち僧侶側から見ると、檀信徒側から見ると、檀信徒の遺骨の事であり、先祖供養を求められた時のお墓の話の中で、お寺にお墓が無いという理由だけで、檀家にはならないということがあった。

檀信徒側から見ると、お墓というのではなく、檀信徒の愛する家族の遺骨の事であり、先祖供養を

するということであり、仏そのものの自体の捉え方が違うのではないか。

私たちはそこに意識を向けていかなければならないのではないか。

二日目

○二日目問題提起

座長から、追加の問題提起がなされた。

基調講演の中に、「後漢以後に釈教わたりて対論の後、釈教やうやく流布する」という開目抄の一節が引用されていました。対論、すなわち人々と対話し議論をして、初めて仏教は広まるということです。また、「ミリンダ王の問い」のように、異なる宗教と対論することによって、仏教の理解を深めていくことが出来ます。

二日目は、我々と同じ日蓮聖人を信仰し、同じ法華経を依経としながらも、我々と違った教学を持っている教団、特に大石寺系新宗教が、お寺に対論をしに来たという設定で、対論のロールプレイを行います。また、コーディネーターより、本宗の教学との相違について説明をしていただきます。これらを通じて、我々自身の足元を見つめ直していきたいと思います。

また、私たち日蓮宗の僧侶も、檀信徒や未信徒から見れば、大石寺系新宗教の人たちと同じようなことをしていると見なされかねないのではないかとという視点でも、我々自身を見つめ直してみたいと思います。

以上の問題提起に従って、一日目と同様に三グループに別れて討議した。

グループA

- ・大石寺系新宗教と言えば、宗教団体と同時に政治団体ということも考えなければならない。国立戒壇を政治的に利用しているのではないか。
- ・日蓮大聖人の教えを本当は理解していないのではないか。
- ・大石寺系新宗教は、三大秘法抄をもっと主張してもいいのに何故それをしないのだろうか。
- ・国立戒壇についてお題目の受持だけで納得していたのではないか。
- ・今、宗門には色々な事が投げかけられている。
- ・田中智学師の影響で明治時代に教学の整理がなされた。
- ・日蓮宗の戒壇とは、そもそも本尊というものがバラバラではないのか。雑乱勧請と言われても、しょうがないのではないか。相伝がないから勧請がバラバラであると、大石寺系新宗教に責められるのであろう。
- ・色々な歴史があつたが、振り返って見直す時期ではないか？
- ・しかし一方で歴史的な形式も大切にするべきである。
- ・身延山の大本堂や祖師堂に御曼荼羅と積尊、多宝如来、日蓮大聖人尊像が祀られているが、大曼荼羅だけではない。
- ・日蓮宗は久遠本仏を中心として諸仏を勧請しているのである。(宇宙全体の諸仏・諸天を大曼荼羅に勧請している)
- ・宗門として、今まで守られてきた伝統を引き継ぐことは大切である。

グループB

- ・日蓮宗の本尊は久遠実成の本師釈迦牟尼仏ということは分かっている。しかし、それを表現したときに本尊の勧請の形式というものがバラバラである。また、形式は理解できるがそれが何を表現しているのか本質が分かりづらい。

一つに定まっていないということを、どのように捉えることが大事なのか。だからこそ檀信徒に説明する事も難しいのではないか。そこを質問されることが多いのではないだろうか。

・「宗務院で本尊や本仏の勧請形式を統一して欲しい」という意見があったが、数百年の歴史がある形式を変えろということとは難しい事である。

グループC

・これから色々なことに対応していく上で、準備をしなければならないことが沢山ある。

・そもそも本尊と本仏という言葉の違いが明確になっていないということ。それぞれがどういうものであるか、ということをはっきりさせることが必要である。例えば日蓮宗では御本尊というと御曼荼羅、久遠実成の本師釈迦牟尼仏のどちらであるのか。日蓮宗の教学の中でも同じことが言えるのではないか。どのように救済されるのかという理屈をもっと明確にすることが大事である。

・我々が生きていく上で、本尊がどのようにかかわってくるのか、本尊の力の凄さをどう伝えていくのかということをもっとよく考えて、檀信徒に示していかなければならない。

・話し合いの対論の場合は、自分の主張を押し付けるだけでは対論にならないので、話し合いのルールを決めてから対論することが大切である。

三、まとめ

今回の中央教研では、仏陀観や本尊観について四先生の講演を聞く中で、仏陀観や本尊観を見つめ直す良い機会になった。

対論という形で問答をするロールプレイを見ながら、自分自身で感じた思いを胸に、私たち僧侶自身も足元を見つめる必要がある。参加者からは、我々はもつと勉強しなければならない。日蓮宗の僧侶には、足りないところが沢山あるということ再認識できたという意見があった。

何が重要でそれをどのように檀信徒に伝えていくかということも考えさせられた。

我々僧侶自身も仏陀観や本尊観というものをしっかりと整理しながら、これからの檀信徒・未信徒の教化に活かしていくかなければならない。

また、運営方法については、活発な討議をもらう為に、三グループに分かれて少人数で班を構成し沢山の意見が交わされる事を求めたが、逆に人数が少なくプレッシャーを感じたのか、互いの意見があまり出なかった。もつと運営等で話の展開を補助する必要があると感じた。今回の経験を活かし、次回はより活発な討議を行いたい。

第Ⅲ分散会

ブツダと私たちを考える―対論の教化学―

座長 鶏内泰寛

コーディネーター 柴田章延

ロールプレイ 山田孝行・柴田章延

助言者 蓑輪顕量

記録 中井本蓉・松田英秀

運営 河崎俊宏・木村匡宏

一、運営について

第三分散会は十九名が参加した。全会共通の問題提起を二つに分け、第一日目に前半を、第二日目に後半を配分して討議を行った。三宗派合同による富士門流の流れを汲む本宗教師の参加者もあった。

二、問題提起

今回の中央教化研究会議は、第一部で「仏陀論」と題したご講演を各講師先生より頂きました。仏教関連書がこれまでだけ流布する時代にあつては、人々にとって仏陀・釈尊の受け止め方に変化が生まれてきています。私たちはさまざまな視点に関心を払いつつ、私たちの仏陀観、釈尊観をつねに確認し、「久遠実成の本師釈迦牟尼仏」への鑽仰をさ

らに確固たるものにしなくてはなりません。

さて、日蓮聖人を宗祖と仰ぐ他の宗派・教団・団体にあつては、聖人の教えのとらえ方と本尊の位置づけなど、さまざまな点でわれわれ日蓮宗と基本的な考えを異にします。教団史をひもとけば、そうして教義の解釈の違いが相反と分裂を生み、離合集散のエネルギーともなってきたことは明らかです。

三、分散会討議

一日目

【仏陀観についての講演の感想】

討議を始めるにあたり、まず自己紹介をすると共に基調講演を受けての感想を述べてもらった。

- ・ 仏陀観という趣旨からずれるが、蓑輪先生のご講演の中で、生きた人の生老病死に向き合う台湾仏教の活動や布教方法が興味深かった。過疎地にある自坊のこれからを考える上で参考になりたい。
- ・ 自坊の祖師像には白毫があり、伝統的に大聖人を仏様として拝んでいる寺であるので、あまり公の場で日蓮本仏論を否定されるといやだなと思う。
- ・ 学校で習った「大乘非仏説」ということが中々頭から離れなかったが、鈴木先生のご講演を聴いて、まず原点に立ち返るといふ視点を学ぶことができた。
- ・ 同じ仏様を見るのにも色々な見方があるんだと改めて確認できた。自身の仏陀観を確固たるものにしていくことがこれからの布教に大きく関わってくると思う。
- ・ 「久遠」や「本仏」という言葉は檀信徒に伝わりにくい。自分の師匠が昔「お祖師様をお父さんとするならば、お

釈迦さまはお祖父さんのような方なんだよ」と檀信徒に言っていたことを思い出した。

・教師と檀信徒との間の「仏陀観」の違いをどう埋めていくかこれから勉強していきたい。鈴木先生のご講演からのヒントを得られた気がする。

・庵谷先生のご講演を聴いて、学生時代に聞いて以来三十年わからなかった「本因本果本国土妙」をやっと理解でき、感動した。

・「三身論」の重要性を強く感じた。地元の若い教師に聞いても答えられる者は少ない。自身もこれからよりしっかりと学び発信していきたい。

・檀信徒に葬儀の意義についての説明を求められたりすると、自分の勉強不足を痛感する。本日触れた「仏陀論」は根本的なテーマであると思うのでこれを機にきちんと勉強したい。

・仏陀をどのように捉え受け止めるか、そこからのような教化を展開していくか、ということ考えたとき、日頃檀信徒の疑問に対して確信をもって答えられていただろうかと反省した。

・自分は普段「仏陀」というと悟りの象徴としての姿ばかりを想起していたが、本日の講演を聴いて、インドに生まれて実在した釈尊も大事なんだとわかった。これからは法報応の三身すべてを念頭に置いて勉強していきたい。

・自坊では行事への参拝の七割が浄土真宗など他宗の檀信徒の方で占められる。他宗の方にお話をさせていただく上で、お祖師様の仏陀観を学んで今後の布教の参考にしていければと思っている。

・檀信徒の素朴な疑問に答える際にも、自分がしっかりとお祖師様の仏陀観をふまえて答えていくことが必要だと思つた。庵谷先生のご講演で、本宗と他団体との仏陀観の違いが理解できた。

以上概観すると、檀信徒の疑問に向き合う際、自身の仏陀観に心許なさを感じているという意見が多くみられた。

また「教師と檀信徒との間の「仏陀観」の違いをどう埋めていくか」という問題意識は、まさしく今中央教研における問題提起の「仏教関連書がこれだけ流布する時代にあつては、人々にとつて仏陀・釈尊の受け止め方に変化が生まれてきています」に則したものである。教化する側とされる側とのそもその前提の違いも明確にしていく必要がある。さらに日蓮聖人を仏様として拜んでいるという参加者の意見からは、本尊論を論じる上で宗門内における多様性に対する配慮の必要性を喚起するものであつた。

【日蓮宗の本尊とは何か】

次に、檀信徒に対して「日蓮宗の本尊」を現状どのように説明しているか話してもらつた。

・そういった質問をされたときはまず一緒にお題目をお唱えしようと言うようにしている。いきなり難しい言葉で説明してもかえつて反感を持たれてしまう場合がある。

・まともに一から説明しようとすると檀信徒は逃げてしまう。自分の場合は、「お仏壇の一番奥にある大曼荼羅であり、一番大切なものです」と説明している。そのご本尊とは一体なんなのかと聞かれたら、「日蓮聖人がお示しになられた法華経の世界であり、実は私たちもその中にいるんですよ」と答える。

・まだ経験が浅いので檀信徒に対してご本尊について話す機会はないが、将来的にはできるだけわかりやすい言葉で説明ができるように勉強していきたいと思つている。

・葬儀の場におけるご本尊の説明は特に大事だと思うので、自分は必ずするようにしている。まず大曼荼羅を祭壇に安置して、「これから故人をこの大曼荼羅に示される世界にお送りします。真ん中に書かれたお題目が一番大切なご本尊です」と説明する。また普段からも機会があればお話をして、「私たちの中にも大曼荼羅の世界があるんで

すよ」と伝えている。

・自坊の大曼荼羅にはお題目と同じ大きさの文字で「日蓮」と書いてあるし、祖師像には白毫がある。お釈迦さまは遠すぎてよくわからないが、お釈迦さまが本当に伝えたかったことを再発掘して伝えてくださったのが日蓮聖人。だから仏さまと同じようにして拜んでいる。地元の仏教会で仲良くしている他宗寺院の僧侶に、「ほとんどの日蓮宗のお寺は日蓮聖人像をお祀りしているけど、あれは日蓮聖人を仏さまとして拜んでいるのではないですか」と聞かれることがある。私は「はいそうです」と答えている。

・ご本尊とは大曼荼羅であり、久遠のお釈迦様である。

・ご本尊とは仏さまの教えを表した大曼荼羅であり、同時にそれを説かれたお釈迦さまのこともあると話している。

以上、本宗の本尊をどのように説明しているか述べてもらった概要を列挙したが、全体に共通しているのはとにかく平易な言葉で伝えるよう心掛けている点、そして本尊を説明するとするならばそれはまず大曼荼羅であると答えているという点であった。ただし、宗旨に規定されるように本宗の本尊は「久遠の本師釈迦牟尼仏」である。実際、久遠のお釈迦様を本尊だとしている参加者も何人か見られたが、それらも常に大曼荼羅と併存している形で説明している。本尊についてしっかりと確認しておく必要がある。

二日目

分散会討議第二日目は、大石寺系新宗教の一部の団体が実際にどのような法論を持ちかけてくるのかを運営によるロールプレイで確認してもらいながら、参加者の体験を皆で共有しつつ、自分の身に起こったかどうか具体的に考えてもらった。

【参加者の法論体験】

まず、実際に法論を持ちかけられたことがあるか、参加者に体験談を募った。

- ・身分を隠して近づいて来ることが多く、話していくうちに段々と自身の団体の教義的なキーワードを出してくる。
 - ・また、お寺に行くとは地獄に落ちると思っており、目に見える現証しか重視していないという特徴がある。ファミレスや自宅に呼ばれることもある。大体二〜三人組である。
 - ・思いのほか友好的に接してくる団体もある。葬儀に僧を呼ぶことや、戒名をもらうことも文化的なものとしてよしとされている場合もある。
 - ・よく言われる「釈尊≡脱仏（ぬけがら）」と考えているのは末端の人間で、上層部の方ではそのように捉えてはいないと思う。
 - ・近所にある団体の大きな支部施設があるが、近年はフレンドリーに接してくる。月に二〜三回お互いの新聞を交換したりしている。こちらから質問しても、テキストで習ったこと以外ははぐらかして答ええない。
 - ・お坊さんは勉強していないと思いついで来るので、色々知っているとわかると見直されたりする。
 - ・駅で老人と若者の二人組が冊子を配っているのを見たことがある。
 - ・ファミレスで老人が一人で食事しているところに、二人組が来て勧誘しているのを見た。
- 全体として、まず法論を持ちかけられたという体験はないという参加者が多く、近所に支部があるかなど、地域によつて認識の差がある。また体験談を概観しても、激しく論難されたという話は少ない印象であった。
- 次に運営側で依頼して当日語られた体験談を以下に紹介する。

・ 一方的な誹謗中傷をインターネット上に公開されたり、檀信徒へのいやがらせともとれる行為、またSNS上で自坊へ来るというような脅しを書かれたりしている。同時期に他の団体から新聞が大量に送られてきた。檀信徒、ひいては宗門を守るためにも、備えとしてどのような法論を持ちかけられるか勉強しておくべきではないかと思う。マインドコントロールに関する相談も来るようになった。対応できるよう知っておくべきだと思う。

・ ある団体に入信していた子供が脱退したからと、母親から関係書物等の処分を依頼された。しかし後から、本人の承諾を得ていなかったことがわかった。その後何年も「ばちがあたる」と心配し続けていたことを知った。脱退したからといってすぐに心が切り替わるものではないので気を付けなければいけない。

以上の体験談からは、まず、インターネットを利用した誹謗中傷や、その危害が檀信徒にまで及ぶ可能性を考慮していく必要性が示されている。事前の備えとして、相手の活動手段や布教方法を知っておくことは、インターネットによって手軽に全世界へ情報発信できる現代にあつて、もはや地域差無く必須のことであるといってもいいだろう。また脱退した人の精神状態について、短絡的に判断してはいけないという警告もあつた。この体験談を受けて、討議は次の設問に移る。

【「法論」ではなく、「相談」にいられた場合】

脱退後もすぐには気持ちの切り替えができないのと同様に、団体に所属していながら組織に疑問を感じ、脱退するまでの間に思い悩む時期があるということも当然ながら想定される。そのさなかにあるような人が自坊へ相談に来たことはあるか、またその時の対応などについて討議してもらった。

・「上層部の人の言っていることやっていることが違っていて気になるが、教えに救われた恩義があるからこそ抜けられない」「お寺に色花を飾るな、神社に行つてはいけないなどといわれることに疑問を感じる」といった声を聞いた。

・親の信仰があつて抜けられない人もいる。脱退したあとのいじめやたたりを危惧する声も聞く。

・自坊の地域にはそういった団体がほとんどいないが、実際に来たら話を聞いて対応を考えるしかないと思う。

・脱退した後でも、同じ組織構造を求め人もいるので、お寺だけで抱え込む必要はない。自分から他の団体へ移つていく場合もある。

・ある大きな支部では、老若男女生き生きと活動していて、出会いの場にもなっている。うまくやっているとところもある。

所属団体に疑問を感じているが、自分が救われた恩義があり、親など周囲の人との関係、そしてやはりたりなど脱退してからの心配事があつて躊躇する人が相談にくるようであった。対応としては、とにかく話を聞いてあげるといふ参加者がほとんどだったが、対応できない場合は宗門の総合相談所に相談するという方法もあると紹介した。

・ある団体から抜きたいと相談してきた人を信行会に招き入れたが、しばらくして会の雰囲気がかつかり変わつてしまひ、ある意味その人に乗つ取られたような形になってしまったという事例がある。寺の組織とはまったく異なるやり方があるので、安易に受け入れてしまうのは危険な場合もある。

また反対に、檀信徒が新宗教団体に入りたいと言ってきたらどうするか？ という問いには以下のような意見が挙

がった。

・そのような事態になったことがないのでわからないが、話をきいてあげるしかないと思う。
・秘密の悩みを話してしまったので入らざるを得なくなったという人を知っている。若い人には、絶対に秘密を話してはいけないよと言っている。

・ある人は、より難しい教義を教えてくださいましたからと入信していった。自坊の父は「お題目唱えればいいから！」としか言っていないかった。

・決意してくるのだから、話を聞くにも、こちらから話をするにも、きちんとプロセスを踏んでいく必要があると思う。また、お寺ではなく新宗教団体でしか救われない人もいるのかなとも思う。

四、まとめ

以上二日間にわたって討議し、次のことが確認された。

まず第一日目は、「日蓮宗の本尊とは何か？」という問いに自信をもって答えるためには、より確固とした仏陀観を自身の中にもっている必要があることを再認識した。また、日蓮聖人を仏様として拝む伝統のある寺院を自坊とする参加者がいたことで、全体としてより多様性のある視点を得られた。さらに本尊を説明するにあたっては、宗旨に規定されるところの「久遠の本師釈迦牟尼仏」より先に、「大曼荼羅」を本尊として説明しているという参加者がほとんどだったのは特筆すべき点である。二つの本尊が併存する現状が明らかになった。

第二日目は、実際に新宗教団体から何らかの働きかけがあった体験談を共有すると共に、そのような事態に陥ったときどのように対応すべきか具体的に討議した。結果としては、新宗教団体が身近にあるかどうかの地域差がかなり

あるものの、団参などの出向先で法論を持ち掛けられ、インターネットを利用して誹謗中傷される事例もあることを考えると、自坊や檀信徒を守るためにも事前にそのような団体に関することは勉強しておくべきであろうという結論に至った。また、新宗教団体を脱退した人、あるいは脱退したいが悩んでいる人への対応についても、留意して接していくことが大切だと確認された。

全体として、どうしても実際の体験談を持つ人の話が主になったが、まだ実体験のない参加者も問題意識を持つことができたので、今後宗門として対策を進めていく上でよい下地作りの機会になったといえるだろう。

第IV分散会

ブツダと私たちを考える―対論の教化学―

座長 齋藤宣裕

コーディネーター 伊藤瑞康

ロールプレイ 藤崎善隆・中村龍央

記録 山口功倫

運営 中條暁仁・渡邊英晃

一、運営について

第IV分散会では、一日目の討議時間は、参加者に自己紹介を兼ねた基調報告及び基調講演の感想を求め、座長より関連する質問を投げかけ、基調報告及び基調講演の理解を深め、布教現場における問題を共有することに重点を置いた。

二日目は、討議時間に入る前、全分散会共通の問題提起を五階講堂にて行い、その後、各分散会場に移動した。第IV分散会は、コーディネーターより問題提起の補足説明を加え、新宗教の一部団体が行う模擬対論のロールプレイ及びコーディネーターによる解説を行った。最後に、ロールプレイ及び解説の感想を参加者に求め、法華系新宗教に関わる体験を共有した。

出席者は二十二名だった。

二、問題提起

全体会議冒頭の問題提起参照

三、分散会討議

一日目

討議の端緒として、参加者に自己紹介を兼ねた、基調報告及び基調講演の感想を求めた。それぞれの感想のポイントを以下に列挙する。

- ・人間仏陀と本仏の違いを深めていきたい。
- ・江戸時代の大乗非仏説を思い出した。
- ・現代の日蓮宗において、祖師信仰が強い部分があるので、その辺をあぶり出して欲しかった。
- ・人間仏陀と、先師が説いた仏陀が、現代では問題になっていると気づいた。
- ・仏陀と、久遠実成の本師釈迦牟尼仏をどのように説いていくか考えさせられた。
- ・仏教ブームに乗り勉強している一般の人と話す、仏陀の捉え方が私達と異なるので勉強になる。
- ・過疎問題、祈願、回向など、教化センターで布教現場の問題ばかりを考えているので、私達は仏陀を目指していると気づかされた。

仏陀観を考える場合、お釈迦様とはどういう人間だったのかが非常に大切であろうと思われる。その点を踏まえて、檀信徒からお釈迦様はどういう人だったかと聞かれた場合、どう返答をするのか参加者に問いかけた。

それぞれの答えのポイントを以下に列挙する。

・法華経が大前提である。歴史上のお釈迦様は実在した。私たち衆生を救うため、人間の姿で方便として現れた。実際には永遠の命を持っている。それを聞こうとするかしないかで、私たちの救われ方も変わってくる。

・釈尊が大好きである。人間を超越したところもあるが、溢れ出る人間性にも惹かれる。祈れば祈るほど私たちの近くにいて、見ようと思えば見える。

・完成された人間である。三十二相八十種好というくらいの特徴がある。

・実在のお釈迦様を説明すると導入しやすいが、そこを飛ばして説明することは難しい。

お釈迦様の人間的な魅力は、皆を惹きつけてきた一因のようである。日蓮宗寺院は祖師信仰が強い部分があるが、お寺に来る人はお釈迦様ではなく、お祖師様に手を合わせているのではないだろうか。参加者のお寺に来る人はどうか、質問を行った。

それぞれの答えのポイントを以下に列挙する。

・仏陀論は自我傷を訓読で読んで説明している。久遠の本仏は、お祖師様が繋いでくれたと説明をしている。お題目がお釈迦様のもう一つの名前である。

・身延は大聖人のお山というイメージがあるので、みなお祖師様を拝んでいる。

・お寺では祖師関係の行事は行っているが、お釈迦様の聖日では法要など行っていない。お参りに来る人は、お釈迦様を身近に感じていない。

・宗派の名前も日蓮宗であるし、檀信徒の仏壇には日蓮聖人像を安置している。法話も日蓮聖人のものが多い。

・行事なども含めて、どうしても祖師信仰に傾いてしまう。二千年以上前のことなので、分かりやすく伝えることは

とても難しい。

次に、檀信徒から久遠実成の本師釈迦牟尼仏について説明を求められた場合、どう返答するか参加者に意見を求めた。

それぞれの答えのポイントを以下に列挙する。

- ・人間のお釈迦様ならばイメージできるし伝えることができるが、無始無終の久遠実成本師釈迦牟尼仏は、はっきりとイメージし難く、伝え難い。
- ・日本人の久遠の見方は靈魂観に依るところが大きい。宗教は必ず永遠性を持つ。その国が持っている本来のものと結びつきやすい。久遠の説明を、先祖との繋がりと云ったり、宇宙と云ったり、神仏に守られている日蓮聖人と云ったりする。

・曼荼羅本尊を見せて、中心の南無妙法蓮華経を拜んでいる。この南無妙法蓮華経がお釈迦様ですと説明する。

二日目

全分散会共通の問題提起を行い、各分散会に分かれ、ロールプレイを行った。それに対する感想や体験談などを参加者に求めた。

それぞれの答えのポイントを以下に列挙する。

- ・行脚中に法華系新宗教との接触があったが、議論にならず、強引に行脚を止められるようなことがあった。
- ・突然の来寺に対しては、寺族が対応することが多いのではないか。
- ・先代のときは法華系新宗教の来寺が多くあったが、現在は少ない。檀信徒に対する接触は多少ある。

- ・お寺に来た人を救いたいという気持ちもある。
 - ・彼らも被害者であるという感覚を持ち続けることも大切であろう。
 - ・法論をしてお寺に来る人は、知識が表面的である。
 - ・一人でお寺に来る人は、自分の信仰を探しているのかもしれない。
 - ・ある法華系新宗教は大きな教学的変更があったので、末端の信者は揺らいでいる。
 - ・日蓮宗として三大秘法抄の扱いについては、はっきりしたほうが良い。
 - ・法華系新宗教の人には、生半可な知識よりも、自分の信仰をさらけ出すことが大切。
 - ・公営団地の自治会活動やPTA役員、高齢者の病院の送迎や買い物の手伝いなど、生活に密接な関係ができあがると、信仰云々ではなく入信することが多い。
 - ・子供の頃から家族で信仰をしていると、青年部で出会って結婚したり、会に行くと仲間がいたりで、脱会は難しい。
 - ・人間関係や育った環境で入信した場合、脱会は難しくなる。
 - ・教団や人によって、信仰を表明していたり、隠れて信仰していたりする。
- 他にももう少し踏み込んだ体験談なども多く語られた。

四、終わりに

檀信徒だけではなく未信徒にも、丸暗記ではなく自分の言葉で寄り添った言葉で布教していくことが大切である。お寺に法論に来る人自身も、不安を抱えているといえよう。機械的に対応するのではなく、彼らに寄り添い学びを深めていくような積み重ねが、彼らを救うのではないかと纏め、討議が締めくくられた。